

膜で突き抜ける！ 喜多村 淳

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■膜との出会い

1971年生まれ、東京出身の喜多村淳さん。横浜国立大学では、最初から建築構造に惹かれたのではなく、空間構成に少し興味がある程度の気持ちだった。大学院から本格的に構造エンジニアを目指す道へと舵を切ったのは、喜多村さんが野球青年のとき、後楽園球場から東京ドームになった際の膜構造を体感したからかもしれない。「四角い建物より面白そう」と思い入った石井研究室は、日本膜構造協会の会長を務めていた石井一夫教授が率いていた。石井教授は「膜構造の設計法に関する一連の業績」で、日本建築学会業績賞を受賞されているエキスパートだ。喜多村さんは石井研究室で膜の研究に取り組み、卒業後は膜を専門とする太陽工業にエンジニアとして入社したのです。大島病院車寄せ棟（2016年）をはじめ、中小規模の膜構造を設計してきた。大規模なドームクラスは構造設計者と協働して膜の設計を担当する。ルツェルン・フェスティバルアーク・ノヴァ（アニッシュ・カプーア+磯崎新+イソザキ・アキオ アンド アソシエイツ）が記憶に残ると、喜多村さんがいうのは誰でも納得できるだろう。

■ETFEのランニングスタジアム

構造設計者として喜多村淳さんの名前が出たのは「新豊洲Brilliaランニングスタジアム」での受賞が大きい。構造家・萩生田秀之さん（KAP代表取締役）と建築家・武松幸治さん（E.P.A環境変換装置建築研究所取締役）らとともに日本構造デザイン賞（2017年）、BCS賞（2018年）など受賞、日本建築学会作品賞へと続いた。ETFEの浮遊感や、専門家どうしの融合などを高く評価されての受賞である。太陽工業のプリンシパルエンジニアとして勤務する喜多村さんが、個人として受賞したのは画期的なことだった。ETFEの使用実績をつくり、告示化（一般化）し、普及さ

せたいという膜業界の思惑とが巧く噛み合ったのです。日本構造家倶楽部に入ることができて、構造家として横のつながりも広がった。つくる立場で構造設計をしてきたエンジニアが、構造家として認知された受賞であったのです。斎藤公男先生からも直接指導をもらえるようになったのは大きな感謝であるという。新豊洲から有明への移転も決まって、最初のコンセプトであった「移設のできる施設」も証明できそうです。

■膜の可能性

膜自体は工業製品だが、建築となると一品ものの設計で製作するため、取合いは難しい。鉄骨との摺合せ、構造的な張力処理、雨水処理の問題など検討しなければ進まない。もう一つ、膜の可能性が広がらない要因に、法律的に告示の縛りがあるという。諸外国のスタジアムのような開放的な空間構成ができない理由でもある。これをなんとかしなければならぬ。日本膜構造協会の一員として研鑽し、行政に働きかける役目も担う喜多村さんなのです。編集長は「ETFEで色の表現ができるのは素晴らしいが、透明性や明るさだけではつまらない」と鋭い。喜多村さんが膜の可能性をもっと広げたいのは山々だ。そのためにも告示を乗り越えて、最小限の軽量素材で世界をやわらかく笑顔で包むような膜構造を目指したい。ワクワクする仕事がしたい！と、若い人たちにも思ってもらいたいと思う。大規模膜建築の経験が少ない自社の若い技術者を憂うのだ。まずはスポーツ練習場や中規模シエルトターから、用途と興味を広げてほしい、また積極的にどんどん外に出て行ってほしいと考えるのです。たまに高校時代の仲間と野球をするのが喜多村さんのリラックスタイムだが、ドームで体感した膜から離れることはないようです。

